

《大企研エッセイ自選集3》

「歴史の真実」 池田佳史（弁護士）

私は、中学生の頃、司馬遼太郎氏の歴史小説をよく読んだ。大学生、弁護士と年齢や立場が変わっても、昔読んだ司馬氏の小説を引っ張り出して読むこともあった。特に読むたびに新しい発見があるというのではなく、その明快な叙述に一種の安心感があって、風邪を引いて寝込んだときなどの頭を使わない暇つぶしとしてはもってこいのものだったのである。ここで私のいう明快な叙述というのは、善玉と悪玉がはっきりしているということではなく、時代や人物の解釈が明快という意味である。

司馬氏の小説に「花神」という大山益次郎を描いた作品がある。この小説に登場する人物に海江田信義という者がいる。この人物は、「花神」の中では、徹底的に頑迷な小物として描かれており、大山益次郎暗殺の首謀者でないかとされている。

私は、この明快な人物解釈を真実であると信じきっていた。しかし、1996年にUBC（カナダのブリティッシュ・コロンビア大学）に留学しているときに、このことに疑いを持たせる本と出合った。ある日、私が日本法担当教授であった故ステファン・サルツバーグ氏の部屋の前を通ったとき、そこに積まれていた数冊の日本の本の中に「海江田信義の幕末維新」（東郷尚武著）というタイトルの本があるのを見かけた。サルツバーグ氏は、UBCにおける日本法研究部門の責任者として日本の本を購入する権限を有していたようであり、同氏の注文した日本の本はロースクールまたは大学の図書館に蔵書されていた。同氏が、いかなる動機でこの本を購入しようと考えたのかは、残念ながら聞く機会を逸してしまっただけであるが、海江田信義という人は司法畑でも仕事をした人で、民法、民事訴訟法の制定の際には名前が出てくるので、その関係かもしれない。この本は、結局、立ち読みのようにしてほんの少し読んだだけであるが、司馬氏の小説とはどうやら別の見方があるらしいと知った。序文で「もちろん、国民作家として名高い司馬氏の作品に異議を唱えようなどと大それたことを考えているわけではない。・・・海江田に海江田なりの言い分があるだろうし・・・一言弁護したい気になるだけである」と謙虚というか皮肉っぽくとか書いているのがおもしろかった。

私は、最近、このことを思い出して、この本を探して購入した。最近になってというのは、やはり司馬氏の「坂の上の雲」ではロシアの皇帝ニコライ2世を精神年齢の低い暗君として描かれているが、吉村昭氏の「ニコライ遭難」では、その若いときには周りの者に気を遣う、少なくとも英君の素質を有する皇太子として描かれている。私は、吉村昭氏の小説のファンでもあるので、やはり、歴史には光の当て方によって異なる解釈が可能であるとのひどく当たり前のことに思いいたったからである。ちなみに、同氏の「生麦事件」にも海江田信義がでてくるが、どちらかと言えば能吏として描かれているように思う。

この「海江田信義の幕末維新」を読んだ印象としては、海江田信義という人は、時代の波に乗っただけの普通の人だということ、頑迷さも情愛も事務処理能力も全てがそこそこにあったということである。少なくとも、大山益次郎襲撃に関与した（刑法的に言えば、共謀共同正犯もしくは教唆犯）という証拠はなく、いくら血なまぐさい時代とはいえ、そのような精神病的な企てに関与するような人には思えなかった。むしろ、このような普通の人、天才でありラディカルに既存のシステムを変革しようとした大村益次郎と対立関係になってしまったところに、後世まで疑いを持たれる悲劇を生んだのではないだろうか。

もちろん、司馬氏の指摘が真実である可能性は否定できないが、卓抜した技量のある作家の書いた小説のおもしろさとは別に、またはそれゆえに歴史の真実は別にあるのではないかと考えていた方が間違いはないのではないかと思います。

いずれにしても、私は、一方に偏した読書の仕方もそれなりに楽しいが、歴史の真実に思いをいたし、双方の言い分を聞くような読書もよいものであると思う。